

船団

第119号

特集

今語の季



若森 京子

蛩ぶくろ子規の寢床は10ワット

青梅を挽ぐはるかより青馬一頭

兜太恋し夏蚕のくにの草枕

長い戦後アルバムは抜け殻のように

空蟬やこの世に普段着ぬいだまま

いくどめの灯籠流しか生かされて

八月やすこし老いたるおもてなし

わたなべ じゅんこ

枇杷をむくテレビはいつもの不純愛

青葉木菟この世の出口で待っている

齟齬相互誤解曲解して麦酒

片蔭を地獄めぐりのバス走るとか

地下鉄にマハラジャの娘夏の雨

夏疾風少年シャワーの匂いして

角道をあけてスイカに手を伸ばす

● 会員作品 ●

渡部 ひとみ

銀紙をチヨコの裏よりむいて夏至

蝸牛水の余韻を背にのせた

広島の方角へ脱ぐ麦藁帽

本当は玉葱嫌いなんだけど

秋の雲箱ごと運ぶカッパ麵

眼差は丘の風車へ葡萄食ぶ

かまきりに雲の流れは早すぎる

赤石 忍

無花果のかたちに空を切る銀河

鉦叩き呪いの効かぬ夜もある

冬めくも元素記号は消え残る

ディラン叫ぶ今日から冬の朝だ

橋上にぽつんと一つ冬に入る

橋をまだ渡ることなく冬陽かな

冬銀河アスパラガスは眠らない

秋月 祐一

はつなつの樹上生活ほーいほーい
風土記には恋する鱈の山滴る
かばの子の耳ふるぱたと初プール
痛風ぢやなかつたみたい泥鰯汁
女子校だか男子校だかわからない
職やめる決意ぐらりと夜の蟻
蚊遣火の灰ぼと落ちて妻爆睡

秋山 泰

椿落ちて裏外手形回収す
寒の明け否認被疑者を仮釈放
壁に春画いてネアンデルタール人
なまはげに喰われてよいこだけの朝
焦げ臭きチャカの匂いを懐手
葬列の木々静寂に冬の晴れ
立ち尽くす父の海辺の海鼠かな

● 会員作品 ●

明星 舞美

宵山の揃いの藍はアイだった
ラベンダーの枕を作るバーテンダー
大文字賀茂の河原に寝そべって
あれよあれよイトーヨーカドーが消えた夏
野分かな鬼の唐衣銀の蛇
コメンテーター多く台風迷走す
台風と豆腐のラッパ近づいて

朝倉 晴美

ぼく教頭君は町長秋茄子
二親等は妹のみトマト熟る
ひとりぼっちの校庭好き糸瓜揺れ
誤字ふたつ残暑見舞いは延着し
メダカ空輸便だんだん孤独好き
新涼やあの子もこの子も愛すべき
転入生つくつくぼうし連れて来た

坪内 稔典

ロンドンにいた日のままに百日紅
ロンドンもひともしごろの百日紅
よく晴れて靈気も秋気も隅っこに
悪霊もバツタも跛扈雲は秋
雲は秋座礁の船を見に行こう
雲は秋膝を抱えて木のベンチ
雲は秋蛸は沈んで水槽に

鶴濱 節子

海月浮く地球は飽きたさて次は
麦秋を女三人ツーリング
紫陽花の青にかくれる深海魚
紫陽花の青にかくれて一年後
緑雨の夜マンボウ連れてマンタ来る
墓歩く外科医も歩く雨上がり
海図見る男の背中大西日

● 会員作品 ●

寺田 伸一

かなしみは青春の臍二月の木
読むほどに童話はかなし夕端居
メルヘンを閉じてキスでしょ桜桃忌
秋時雨日々縮む僕日々縮む
暑さ負け聴くともなしに青江三奈
十三夜女ごころは僕にある
死刑って業は人だけ蝉時雨

田 彰子

木斛は本読むところ夏兆す
雨の中蛍袋に痛みあり
凸凹の石仏前を向いて夏
門くぐり長方形に蝉時雨
火星近づき十二神将滴りぬ
終点で起こされている虫時雨
六番出口台風に出くわして

中原 幸子

ほらよつと心投げ出し素手素足

色のつくことば八千暴れ梅雨

延命は無用夾竹桃白し

首というぐらつくものを端居かな

よう負けるチームがひいき髪洗う

目が口の言えぬこと言う流れ星

これはこれとはばかり俳句の日の蒼天

梨地 ことこ

好きだけど彼女どまりで花水木

荒波やタコが激突素焼つば

夜の蟬ギリシヤ悲劇を見てきたと

夏ともしモダンな家の立木影

やまごぼうの花熟女たちのご到着

ミンミンミン産室の前にいるような

台風くる日絮毛葉つばの前をふあつ

● 会員作品 ●

西村 亜紀子

佳句だくだく雨だくだくだく天の川

足首の小さなタトウ蛇と虹

生身魂思いのままに偏愛す

文机に煩杖ついて遠花火

大夕焼どこかに帰りたくなつた

放屁虫あなたの愛が欲しいのに

大花火すこし遅れて音と君

苗田 苗

陸君の声が聞きたい酷暑かな

文月の赤子黒髪はやわらかし

アメリカの孫も集まる夏座敷

頑固者ひとり発見白日傘

炎昼や田中一村水に浮く

蒲が咲き女七人葦となる

ほんとの蚊うその蚊どちら飛蚊症

阪野 基道

尺蠖や習おうかしらんヴァイオリン
蹠あしうらにも色ある女のバタフライ
蜥蜴来るしつぽなくして人妻と
ちはやぶる蛇衣脱いで神の子ら
あさがおを綺麗なままに殺めたる
わたくしの行く手塞ぐな蛍なら
ちんちんをはみ出し五歳のあっぱっぱ

東 英幸

妹が八十八夜を船で来る
雨の日を図書館に居てリラの花
葉書来る紫陽花のこと書いてあり
荒梅雨や雀固まって鳴かぬ
迷子とはこんなものかと夏祭り
鶏小屋に鶏のいなくて桃啜る
サンダルが乗り込めばサンダルが降りる

● 会員作品 ●

火箱 ひろ

トマトにはトマトの事情ワタシにも
ひまわりが向日葵であるための黄
震度5の我に返っている金魚
親密な金魚がいるという空間
前に行くおばさんが邪魔かなぶんぶん
カンカン帽昭和風味な小父さんと
夕焼けの犬がしみじみ西を向く

陽山 道子

枇杷熟れるクラスメートという間
六月の雨に唄えば楯円形
本の森抜けて揚羽を尾行せよ
緑陰の椅子軋らせてモナリザも
夜の秋大皿小皿積み重ね
父に似て晩夏の肩の弟よ
生きている一日一錠バツタ飛ぶ